
少女戦争～THE Tutorial

reiver

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少女戦争 THE Tutorial

【Nコード】

N17610

【作者名】

receiver

【あらすじ】

都会に上京してきたばかりの青年「遠山怜次」、ある日彼は道中で行き倒れていたゲームクリエイター「軌条」に出会い、なりゆきのまま少女戦争という名のゲームに参加することになるのだが…

序幕（前書き）

初めての執筆です。

至らぬところも多々あるでしょうが、のんびり書いていきますのでよろしく。

プロットとか考えずに書いてるんで文体おかしかったり、誤字脱字あったりすると思いますがご了承ください。

不定期更新です。

序幕

「くそっ…このままじゃ」

小雨がパラパラちらつく曇天の下。

青年は少女を腕に抱えたまま走り続けていた。

満身創痍の状態にもかかわらず、その顔からは諦めという言葉は微塵も感じられない。

むしろ絶対に生きてやるという執念に近い愚直さが伺える。

青年を駆り立てているのは腕の中で浅い呼吸を繰り返す少女を守るため。

青年一人ならば逃げ切るのはそう難しくはなかったはずである。

少女と出会ってまだ日も浅いにもかかわらず青年が少女に尽くすのはなぜなのか。

「うつ！？」

足を滑らせ無様に地面に転がる青年。

受け身の姿勢をとり、少女に危害がいかないよう庇う。

後方から絶えず響いていた足音が同時に鳴りやむ。

極度の緊張で四肢が震えだすも、意を決して青年は振り向いた。

「ははっ…チエックメイトか」

背後にて仁王立ちする異形のモンスターを目にし、絶望という意味を直に知る青年。

「ごめんな、守れなくて」

死を覚悟し、目をつむる青年。

そして血しぶきが舞う。

それは青年のものでも少女のものでもない。

化物のそれだ。

青年はおそろおそろ目を開く。

そこには自身の身の丈の倍はある大剣を振り回す少女の姿があった。連撃を加え、化物の動きが停止した頃、ようやく少女は俺達を振り返った。

西洋風の騎士を思い出させる漆黒の軽装を体に纏い、片目には闇色の眼帯が目立つ。

腰のあたりまでのびた黒髪は次節風に靡いている。

「ふふ、助けるのは今回だけよ。新入り君」

ニコリとした笑顔を俺に向けた刹那、その女は化物に振り返ると大剣を片手で振り回しはじめた。

そんな光景を俺は硬直したまま眺め続けることにしかできなかった。

ああ、どうしてこんなことになっちまったんだ…

序幕（後書き）

次から本格的に書き始めます。

ブローグ

「どうしてこうなった・・・」

都心部にある住宅街の一角にポツリと佇むボロアパート。

その二階にある一室で俺は頭を抱えていた。

テーブルには飲みかけの缶コーヒー、先ほど袋を開けたばかりのポテチが無造作に散らばっている。

冷房を付けっぱなしにしているため部屋の温度は非常に低い。

効き過ぎて寒気すら覚えてくるほどだ。

かといって窓を開ければ立ちくらみを起こすほどの熱気が襲ってくるため、俺は仕方なく冷房の温度を28度に上げることにした。

こうでもしないと脳が回転を辞めてしまいそうなのだ。

窓を閉めているにもかかわらず、絶えず響いてくるセミの泣き声が非常にうっとおしい。

俺が住むアパートのすぐ前に公園が立地しており、そこに生えている木々にそいつら住みついているせいだ。

せつかくの休みだというのに、のんびり昼寝も出来やしない。

俺は深く息を吐くと、住み慣れていない自分の住処をなんとなく見回した。

六畳半しかない部屋にはテレビ、タンス、冷蔵庫といった必要最小限のものしか置かれていない。

部屋は新築つばさが醸し出されており、家賃3万弱とは思えないほど状態が良い。

このアパートに引っ越してきてまだ一週間も経っていないのだからそれもそのはずである。

ただ、唯一の欠点を上げれば、四方八方を高層マンションに塞がれていることだ。

朝から夕方までの間、日が射し込む時間はわずか30分しかない。

洗濯物が乾きにくいのは残念だが、この家賃でここまで良い物件は
そうないだろう。

後悔はしていない。

むしろ今の季節、照りつける灼熱のお天道様を極限回避出来るのは
有難いことだ。

冬になればその考えを改めることになりそうだが、今は考えるのは
よそう。

今はそれよりも真剣に考えなければならぬことがある。

遠山 怜次

年は18、性別（男）、趣味はツーリング

親の反対を押し切り、田舎から上京してきたものの、まだまだ都会
特有の雰囲気になれてないのが現時点での俺の現状だ。

ちなみに田舎といっても頭にドがつくほどの何にもないところで、
近くのコンビニに行くのにも原付で15分はかかる。

特に俺が住んでいた所は四方八方を山に囲まれており、周りには田
んぼや畑といった田舎道が延々と広がっているだけだ。

とまあそんな情景を幼い頃から見て育ってきた俺は、昔から都会と
いうものに憧れていたのさ。

その憧れは中学を卒業する頃には強い決心になり、その頃からバイ
トをして状況するための資金を貯めるようになった。

そして高校を卒業する一ヶ月前、俺は両親に自分の決意を吐き出す
ように言っただ。

予想通り両親は俺の決断に頑固反対の様子を見せた。

後で親父に聞いたが、一人っ子で育った俺が家の家業をつくのだろ
うと信じきっていたらしい。

それでも俺の進路に唯一賛成してくれた人もいた。

今年で八十になる祖父だ。

祖父は俺が両親に上京すると暴露した時、太鼓判を押して親父達を説得してくれるほど喜んでくれた。

俺が旅立つ前日の夜、祖父が言った一言が俺の心に深く突き刺さるように残っている。

「怜次、これだけは覚えておきなさい。

どんな困難な状況にあっても、解決策は必ずある。 救いのない運命というものはない。

災難に合わせて、どこか一方の扉を開けて、救いの道を残している。

└

正直祖父がなぜあんなことを言ったのかはわからないが、その時の祖父の表情は十八年間生きてきて見たことないほど真剣そのものだった。

これから俺に起こる何かを伝えたかったのか、それともただのきまぐれで言ったのかその真意は未だ分からないままだ。

そんな訳で俺は上京をし、今に至る。

それでだ、

なんで俺が自分の経歴を長々と吐露し感慨深く浸っていたのにはちよつとした理由がある。

『現実逃避』

一言で表せばこうなる。

常識を逸した出来事が起こったとき、人間の思考は一時的に停止し、

現実逃避したくなると昔誰かから聞いたことがあるがまさにその通りだ。

現に俺は今、表面上は平静を保ってはいるが、脳裏では1990年代に起こった阪神大震災並みのパニック状態である。

だが自分の経歴を冷静に見つめなおしたことで、多少だが落ち着きを取り戻せた。

俺は改めて目の前のその元凶に視線を戻し考えを巡らすことにする。

「お腹空いた」

俺の目の前には全く面識のない赤の他人である見知らぬ女の子（美少女）がいた。

プロローグ（後書き）

基本一人称で執筆していきます。

稚拙な文章ですが読み続けてくれると幸いです^^；

回想 1 く俺の人生が狂い始めた日く（前書き）

ここからはしばらく長々と回想が続きます。

回想1　俺の人生が狂い始めた日

ことのいきさつを説明するに辺り、日付は三日前まで遡る。

引越しの作業がようやく落ち着いてきた頃、俺は第一に食い扶持となるための働き場所を探すことに時間を割くことにした。

求人雑誌を見て、俺は思わず舌を巻いた。

田舎とは比べ物にならない求人欄。この点は都会ならでわのことだと思う。

特に職種にこだわりはない、心配せずとも直に見つかるだろう。

稼げる仕事なら短期でも派遣でもなんでもやってやるし、覚悟もやる気も有り余っている。

まずは都会の雰囲気にも馴れる、それが現時点での俺の目標さ。

案の定仕事はすぐ見つかった。

某飲食店の厨房のバイトで、自給は820円。

可もなく不可もなく、上京後初めての仕事としては妥当な感じだろう。

家から近いこともあり電話した当日に面接が決まって、その場で即採用をもらった。

・・・今思うと、このときから俺の人生の歯車は狂いかけていたんだなあ、って思う。

それから三日後の初出勤の日、思えばこの日が俺の人生を大きく狂わせた忌まわしき日だ。

念のためアパートをかなり早く出た俺は、近くの本屋で時間を潰していた。

アパートから原付で10分。ギリギリに出ても間に合う距離なのだが、家にも暇でゴロゴロするだけだし仕方ないさ。

立ち読みでもして、これから都会で生きていく為の知識を得ること

に時間を費やした方が余程有意義な時間を過ごせる。

よそ者の俺にとって、都会はなじみのない未知の領域なのさ。

言いすぎかもしれないが、それほど俺にとって都会というものは昔から憧れの対象なのだ。

特に俺はファッションという言葉に疎かった為、入念にファッション雑誌を読み漁っていた。

田舎にいた頃の俺は、家にいるときはもちろん、休みの日は上下ジャージというスタイルが定着化していた為、今風のメンズファッションがよく分らない。

つい先日も駅前でたむろしてた若者達の腰パンという着こなしも最初全く理解できず、俺は都会に対しての考えを若干改めたほどだ。ちなみに田舎にいた頃の俺がどうして上下ジャージという俺流スタイルで過ごしていたのかはまた別の機会に話すでしょう。

気がつけば時間も忘れ、俺はファッション雑誌に読み耽っていた。王道ならば、ここでふと腕時計に目をやると軽く予定の時間を越え、猛ダッシュで目的地に向かうといった展開になるところだろうが、俺はそんなへまはしない。

腕時計に目をやるとそろそろ頃合かと思い、ファッション雑誌を平積みに戻して本屋を後にした。

昔から俺は常に腕時計にかかわらず、目覚ましなどの時計には通常の時間よりも若干針を進めて設定している。

これは俺の祖父からの受け売りでもあり、俺自身の曲げられない十力条の一つでもある。

なぜこんなせこい設定をしているのかって？

それは俺がまだまだ青臭いガキだった頃に経験したトラウマが原因だ。

そのトラウマが原因で、俺は以降友人との大事な約束や、入試の時なんかも時間を先に進める方法をとることにしているって訳。

ちなみにさっきのジャージの話とこのトラウマの話は切り離せないほど密接に関係している。

いずれこの件も含めて時間がある時に話すさ。

↓

そんな訳でちょうど出勤時間の十分前に店へ到着した俺は、乗っていた原付を施錠し裏口から入ろうとした。

ガチャガチャ

「ん？」

壊れているのか、鍵がかかっているのか、ドアノブがうまく回らない。

まだ開店していないのか？ いや、たしか面接の時に営業は11時頃だと聞いているしそれはないか。

腕時計を見るが時間は11時十分前、開店十分前である。

だとすればどうということだろう。

もう一度俺はドアノブを捻ってみるがうんともすんとも動かない。ため息を吐き途方に暮れていると、突然携帯がバイブと共にけたたましく鳴り響いた。

ブルルルル

折りたたんだままの携帯を開いてみると見知らぬ番号が携帯の画面に表示されていた。

だが俺はなんとなくこの番号が誰のものか理解した、おそらく店長のものだろう。

採用されたとき登録するよう言われてて、そのまま忘れていた。

俺は着信ボタンを押し、電話に出ることにした。

「はい、もしもし」

「いやあ遠山君、申し訳ない！実は今朝になって突然本店からの呼び出しを受けてねえ、急遽行かなくてはならなくなっただ」

先日面接の時に聞いた声だと確信し、俺は一瞬安堵したが続いて嫌な予感が脳裏を過ぎった。
は？ 呼び出し？

「ほんとにすまないねえ、終わってそっちに戻るのが18時くらいになっちゃったんだがそれでもいいかな？」

いいわけないだろ、てか店の方はどうすんだよ。

前者は省き、俺は後者のことのみ話すことにする。

「いや・・・まあ別に構いませんけど。ていうか店の方は大丈夫なんですか？」

「そうだね、本来なら十一時開店なんだけどね、今日はシフトに入ってる子も少ないから営業は夜からにしようと思うんだ」

おいおい、そんなてきとーでいいのかよ・・・そもそも今朝呼び出しを受けたんならその時に電話しろや。

てゆうか開店ギリギリに連絡してくるって店長としてどうよ？

俺は口には出さなかったが、頭の中では心底あきれていた。

一経営者として恥ずかしくないのか。

社会人なら、もう少し責任感をもって行動しろってんだ。

てか面接の時も思ってたんだが、この店長かなりいい加減だ。

というのも、俺が時間をかけて書き貰った履歴書を見ることもなく

採用を伝えられたからだ。

店長曰く、最近一気にバイトの学生に辞められてしまったのことで、代わりを躍起になって探していたらしい。

… なんとなく辞めた学生の気持ちがわかる気がする。

「すまないね、できる限り早く戻るようにするから、… あつ、その資料でしたらこちらにまとめてありますので。え、明細書がない？

おっかしいですねえ、たしかにまとめてきたはずなんですが」

…

騒々しい人だな… 俺より年上な気が全くしない。

今は何かと立て込んでいるようだし、後でまたかけ直すとするか。

「それじゃ落ち着いた頃にまたかけ直しますんで、よろし」

ピッ

「あれ、もしもし店長？ 聞いてますか？ … おーい」

一方的に電話を切られた俺はしばらくその場で呆けていた。

… ははは、こんな調子でやってけるのかな？

失笑し、拳を握り締める。

そんな俺を嘲笑うかのような夏蝉の合唱が非常にうつとおしく感じた。

回想 1 - 2 (前書き)

再始動

回想 1 - 2

「さてと、これからどうすっかな」

俺は今、夕方まで時間を潰すためアパート前の公園の椅子に座っている。

自販機で買ったコーヒー片手に、元気よく走りまわる子供たちを眺めるのも悪くない。

俺も昔ああいう時期があっただなあ、としみじみ感傷に浸っていた。

「にしても今日は恐ろしく暑い」

木陰にベンチが収まっているとはいえ、この暑さは結構堪える。とめどなく額を滴る滴がこの暑さを物語っているだろう。

俺が今いる木陰を沖縄の熱帯夜と例えるなら、彼らがいる日向は服を着たまま入るサウナ風呂みたいなものだ。

この暑さじゃ熱中症で誰か倒れていてもおかしくない。

俺が毎朝目覚。しテレビのニュースで見る天気予報のお姉さんも、都心部で今日は最高35度を超える所もあるので日傘を忘れないようにと言っていたくらいだ。

「ヒートアイランド現象も侮れないな」

都会特有の現象を身にしてみte感じる。

人ごとのように俺は苦笑し、飲みかけのコーヒーを飲みほす。

「そつだ、ちょっと遠いが暇だし市民図書館にでも行つてみるか」

おもむろに開いた財布に入っていたまだ傷一つない緑色のカードを見て、気付いたようにハツとした気持ちになる。

先日図書カードを作っていたものの、まだ何も借りていなかったのをは思い出したのだ。

市民図書館はここから一つ前の駅の側にあり、半年前町の下見にきたときに一度立ち寄ったことがあるから道も大体覚えている。

原付で10分走れば着く距離だ。

飲食店とは真逆の方向であるが、あそこならクーラーも効いてて過ごしやすいだろう。

アパートでクーラーをガンガン効かせるのも一つの手ではあるが、それだと俺の財布が大打撃を受けることになる。

引越しやらなんやらで軍資金も半分近く消えてしまったため、極力それだけは避けたい。

俺は立ち上がると、公園の出口に置いてある原付に向けて歩き始めた。

「ん？」

俺が原付のエンジンをかけヘルメットをかぶろうとしたその時、公園のほうで叫び声のようなものが聞こえた。

気のせいかな？ それともついにこの暑さで俺の頭もイカれてしまったのか？

だってこんな真昼間に女性の甲高い悲鳴なんて普通ありえないだろう。むしろ声を認識した俺の脳の方を心配するべきだ。

もしや夏バテ？

たしかにこのところ体が妙にだるいのはある。

でもそれは引越作業での疲れだとしてつきり思ってたんだが…

自慢じゃないが、田舎にいた頃は毎日昼夜問わずダチと一日中畑道を走りまわれるほどの体力はあったんだよ。

都内に住んでるこちらの温室育ちの同年代と比べりゃ体力は段違いだと確信してたほどだ。

これはつまり環境が変わった影響が強いのかもしれない。

田舎の澄んだ空気、濁りのない透明な河川、そびえたつ山々、全て

が懐かしく思えてきた。

それに比べこっちは空気が臭いし川はドロドロ、おまけにどこに出かけても騒音が聞こえる。

都会慣れしてなければ、体力に自信のある俺でなくとも体調は崩す人は結構いるはずだろう。

仕方ない、これからは毎日の筋トレに加え、朝のランニングも追加するかな。

ちなみに田舎にいた頃の俺は暇さえあれば体を動かしていた。

そりゃ自然以外ほばなんにもないド田舎だからな、それぐらいしかやることがなかったさ。

とまあ俺の昔話だけで一時間は語れそうな気もするが、こんな暑苦しい場所に一秒もいたくなかったため、再びヘルメットを被る動作に戻った。

「きゃあああっ」

空耳ではない。

今度ははつきりと聞こえた！

よかった、俺の頭がおかしくなったんじゃないと、一瞬ホッとしたがすぐさま頭を切り替える。

今のは明らかに若い女性の悲鳴。

悲鳴は子供たちが走り回っていた所、つまり俺がいたベンチの方角からたしかに聞こえてきた。

いやな予感がし、ヘルメットを投げ捨てた俺は気づけばその方向へ全力で走っていた。

「はあ、はあ」

こうやって走るのも随分久しぶりな気がする。

随分昔、小学校での徒競争で一等をとったことがあるが、それに似た感覚で俺は走った。

もしかしたら子供たちの誰かが熱中症で倒れたのかもしれない。
最悪の場合を想定し、俺はいつでも掛けれるように携帯電話を取り出しておいた。

俺が息もきれぎれにそこにたどり着くと悲鳴が聞こえた場所、つまりベンチの周りに人だまりができていた。

やはり子供たちに何かあったのだ、こうしちゃいられないと俺はゆつくりと深呼吸をし、心を落ち着ける。

改めて状況を確認してみると、そこには子供たちだけでなく彼らの親御も数人立ちすくんでいた。

彼女等は皆、口に手をあてひそひそと話し合っているようである。ひとまず俺はその内の一人、年配の女性に声をかけることにした。

「はアはア、すみません、どうかしたんですか？」

できる限り冷静を取り繕ったつもりだったが、息も絶え絶えだったため、親御さんたちは多少引いていた。

今は非常時だ、この際スルーしておこう。

しばらくして、俺が問いかけた女性とは別の女性が俺に話しかけてきた。

「もしかして、あなたの知り合いだったりします？」

「へ？」

知り合い？ 誰が？

俺が間の抜けた表情をしていると、女性は俺の手を引いて人だまりの中へとぐいぐい引っ張っていった。

なんだ？ 一体どうなってるんだ。

自然と周りにいた子供たちも道を開け、俺の方に視線が寄せられた。

ここで今更だが気付いたことがある。

子供たちに限らず彼らの親御さんであろう女性達もそこまで深刻な表情をしていなかったのだ。

むしろ現状に対する対応の仕方が分からないといった、そんな顔をしている。

こうして人だまりが消えたことで、ようやくベンチの方に俺の視線がうつされることになった。

俺がベンチに視線を向けて数秒。

多分その時の俺の顔は、ハトが豆鉄砲でも食ったような表情だったと思う。

それくらい予想外で、普段では見られない光景を目にしたのだ。

「……………誰すか？、このおっさん」

俺がさっきまで座っていたベンチには見知らぬ男性が覆いかぶさるようにうつ伏せ状態のまま横たわっていた。

回想 1 - 3 (前書き)

まだまだ続きます

回想 1 - 3

「あー、大丈夫ですか？」

「………えっ？ ああ大丈夫、気にしないでくれ」

女性の一言で俺は現実引き戻されることになる。

腕時計を見ると、目の前の光景を目にしてから五分以上経過していた。

いかんいかん、予想と全くもって違った光景だったため、俺の時間は完全にその場で停止していたようである。

まずは冷静にならなければ。

口には出さず、ゆっくりと深呼吸をして脳内に酸素を送り込む。

スウー、ハアー、スウー、ハアー。

よし、酸素が体中にいきわたったことで思考回路が順調に動き出したみたいだ。

俺は改めてベンチに横たわる男に対して思考を巡らす。

年齢は30代前後だろう、体はうつ伏せだが、首から上はこっちを向いてるため人相は確認できた。

服装は、この炎天下に言語道断な真っ黒のジャージを上下に着いて、まずそれだけでかなり怪しい。

首と手首には髑髏を象ったネックレスとブレスレットをそれぞれつけており、日光に反射した光が俺の視界を若干妨げている。

靴は履いたままで、これも驚くほど真っ黒だ。ついでに言えばソックスも黒である。

ここまでの範囲であつたなら、まだギリギリ妥協は出来たと思う。しかしそれは、これ以上俺の考えを決定的に覆すほどのおかしな点がなければの話だ。

今日の前に寝そべる人物には、明らかにその点が見られる。

俺を含めた周りが妥協出来るボーダーラインを軽く超えてしまつて

いるのだ。

つまり何が言いたいのかというと、男の髪色は日光に煌びやかに反射するほどの金色をしていたということだ。

いや、若干訂正しよう。

金色というよりは黄金色に近い。

こいつの頭イカれてんじゃないかと、本人に面と向かって言いたくなるほど眩しく輝いてる。

そうだな、例えるなら新500円玉。あれの発行直後を想像してみればいい。

あの金ぴかが髪色全体に同化しているみたいなものさ。

むしろ髪がここまで金ぴかなのに、服装が黒一色つてのがどうにも気に食わない。

明らかセンス悪いだろ、田舎育ちの俺にだってそれくらい分かるさ。金ピカの髪＋全身黒服姿の男がこんな真昼間にベンチにうつ伏せになつてのを見れば誰だって驚く。

これが若者ならともかく、ましてや三十前後のおっさんがここまで染めているとなると呆れてものも言えない。

口には出さずに脳内で文句を吐き出した俺は、興味本位近づき肩を軽く叩いてみる。

「おい、あんた大丈夫か？」

・・・目覚める気配が全くない。

反応がないため、今度はさらに強く揺すってみる。

・・・ピクリとも動かない。

返事がない、ただの屍の（ry

「あのー、その人大丈夫ですか？」

俺が途方に暮れ顎に手をやり思考していると、さっきの女性が再び話しかけてきた。

心配そうな仕草で目の前の不審物に目を泳がせている。
態度から察するに彼女が第一発見者なのだろう。

さつきから人一倍男の様子を気にしている様子である。

「んー…これだけやっても起きないのはちょっとおかしいっすね」
魂が抜けているとでもいうべきか、この男からは生気が微塵も感じられない。

周りに子供がいるので口には出さなかったが、万が一の可能性も否定はできないだろう。

…念のため最悪の事態を想定して行動したほうがいいかもしれないな。

「救急車と警察呼んだほうがいいでしょうか？」

俺がこれからの行動に途方にくれていると再び女性が話しかけてきた。

「あ、待つてください。とりあえず脈だけでも確認してみるんで」
反応を確かめただけで、最優先事項を行っていなかった俺は男の首元に手を当て脈を確認することにした。

頼むからあってくれ。

俺は心から祈りをささげる。

脈がなければ生きていようがまいが警察沙汰は避けられない。

こんな真昼間に見知らぬ男がベンチに倒れ掛かっていて、しかもこのベンチは俺がつい数分前まで座っていたのだ。

これが仮にも殺人事件と判断されれば、怪しい人物は間違いなく俺以外にいない。

他には子供連れの主婦達しかいないのだから。

その結果、弁論むなしく重要参考人として取り上げられることになるだろう。

そうなれば当然夕方からの初出勤に間に合わなくなる。

初日から遅刻なんて失態してたまるか！

（頼むぞ…生きててくれよ。。。）

切実に願いをこめながらゆっくりと俺の手のひらが首筋に触れた瞬間、
俺の体が吹っ飛んだ。

回想 1 - 4

「うおおお……」

18年間生きてきてこれほどの物理的な衝撃を受けたのは初めてだよ！

のど元までかかった憤怒の叫びを間一髪で堪えた俺は、男に対して激しく立腹した。

だが周りには幼い子供もいるため下手に大声を出すのは社会上好ましくない。

わずかに残留していた理性がそう呼びかけてこなければ確実に殴りかかっていたところだ。

…この男、なんてタイミングで目覚めやがる。

突如飛び起きた男の後頭部が、脈を殴ろうと油断しきっていた俺の顎を直撃したのだ。

涙腺が潤み、脳汁が出そうなんじゃないかと錯覚するくらい悶絶した。

コントじゃあるまいし、もう少し空気読めよ！ 一歩間違えれば舌噛み切ってたぞ。

人間本当に辛い時は一言も発せない。

身をもってそのことを実感した俺は、一人地面でのた打ち回った。

「漫画でしか見たことないけど……こういうこと実際にあるのねえ」

そんな俺に同情してか、主婦達は口に手をあて憐れむような視線を向けている。

何人か若干含み笑いも見られるがこの際目を瞑っておく。

痛みを我慢し俺は気合で再び途切れそうな自分の意識を保つことに専念した。

三十秒ほど素数を数えてると、ようやく視界が戻ってきた。

まだ多少顎がズキズキするが、さほど問題にはならない。

改めて目の前の状況を確認すると、事態を把握出来ない金髪やロウが体を起こして周りを右往左往していた。

「うつっ・・・痛い、後頭部が割れそうなくらい痛い、なぜだ!？」
俺もいてえよ、それも全部あんたのせいだな。

能天気金髪をさするあんたを見ているだけで、俺の拳が暴発しそうだよ。

ていうか生きてんなら揺すった時に少しでも反応しろ、勘違いするだろが、どんだけ熟睡してんだ。

正直この暑さの中で寝れるあんたがうらやましいよ。

この騒動のおかげでさっきよりギャラリーは増しており、すでに公園一帯には野次馬がわんさか集まり、俺と金パツを取り囲むようにして様子を伺っている。

予想していた最悪の事態は避けられたが、全く事態は收拾していないことが分かる。

むしろ肥大化している。

なんにせよ後々色々と聞かれたりするのはめんどうだ。

これ以上騒がしくなる前にここから姿を消したほうがいいだろう。

面倒ごとはご免こうむる。無駄に時間を浪費するのも馬鹿馬鹿しいからな。

顎の痛みもようやく引いたので、俺はひっそり立ち上がるとその場から逃げるように立ち去ることにした。

やれやれ、さっさと図書館に行って夕方まで昼寝すつか。

俺が回れ右をして、金パツに背を向け歩き出したその時、

ガシッ

「ぐえっ」

自分で出したとは思えない奇声が俺の喉元から発された。

進行方向と逆に引つ張られ首を締め付けられた俺は、軽く咳き込み
すぐさま振り返った。

「…あんたさ、俺に何か恨みでもある訳？」

半分怒り、いや八割怒りを込めた口調で俺は金パツを睨み付けた。
引き止めるにしても首元を普通掴むか？

肩に手を置くにしろ、腕を掴むにしろあるだろうに。

…よし、決めた。

次にこいつが下手なマネをしてきたら事故を装って関節技をお見舞
いしてやる。

昔、祖父から護身術を学んだことがあるから、ひと泡くらい吹かせ
ることができだろう。

仏の顔も三度までということわざ、その身をもって実感させてやる
う。

俺がニヤニヤ薄ら笑いを浮かべている間、金パツは手を口元にあて、
ずっと思案顔をしていた。

何かを思い出しかけている、そう読み取れた。

そしてその表情はみるみる内に変化していき、目を大きく開き、口
を大きく開けたかと思うと突拍子もないことをいいやがった。

「やつぱりその声は・・・お前斉藤か？ やつぱりそうか！ おお、
久しぶりだなア！」

「え？」

大声と共に俺の方に飛び掛ってきた金パツ。

俺は反応すらできず抱き合うように地面に寄り添いながら倒れた。

回想 1 - 5

よし、落ち着け俺。

まずは冷静に状況を把握しようじゃないか。

どんな窮地に陥っても取り乱してはいけない。

祖父からの受け売りだ。

何を優先し実行するのか、それが重要だ。

ゆつくりと目をあけるとそこには30前後のおっさんの度アップ顔が表示されていた。

「ひい！」

俺は反射的に両手で突き飛ばし、後方へ後ずさった。

呼吸をゆつくり繰り返して心拍数を落ち着ける。

「なんなんだアンタ！ いきなり抱きついてきやがって」

だが冷静さが戻ってきたところで、今度は頭に血がのぼってきた。
斎藤ってだれだよ！

初対面の男にここまでフランクにされる覚えはない。

外国のスキンシップじゃあるまいしわけわからん。

「斉藤、まさか私の顔を忘れたのか？」

抱きついてきた本人は悪びれた様子を見せず、ぼんやりと俺に視線を送っている。

ていうかこの男、妙に酒臭い。目も虚ろだし大丈夫か？

「忘れるも何も、俺とアンタは初対面だろ！」

「その一言が胸に突き刺さる・・・だが無理もない、なにしろ五年間ろくに顔を合わせてなかったんだ、気持ちはいくぶん分かる」

「はア？」

「長期間外国にいたせいかな、日本食が恋しくてね、すまんが案内してもらえるか？」

ダメだ、一方的に相手のペースにされている。これじゃ俺の怒りの

パラメータが上昇する一方だ。

「だから知らないってんだろ！ いい加減にしないと警察呼ぶからな」

俺は持っていた携帯を金髪の目の前につきだす。

正直電話する気など毛ほどもない。面倒毎が増えるだけだからな。だがこの酔っ払いに対する良作だといえるだろう。これで少しはうるたえたりと動揺を見せるはずだ。

「くっ、腹が減りすぎて眩暈が・・・」

違う、それはアンタが飲みすぎたせいだよ。

俺の予想とは裏腹に、突然金髪が地面に腰をつき、額の辺りを片手で押さえていた。

ああ、これはもう警察に突き出したほうが早く済むかもしれない。会話が成り立たない相手ほどやかいことはない、俺はガチで警察に電話することにしダイヤルを押し始めた。

「ちよつとアンタ、友人なんでしょ？ ほつたらかしなんてかわいそうじゃない」

俺が腰をついた金髪を平然と見下しながら携帯を弄っていた時、周囲から声があがった。

なぜだろう、ギャラリーの視線が俺の方に集中している気がする。俺そんなおかしいこと言っただけな。

「だからさ、俺とこの金髪は初対面な訳で・・・」
そこまで言ってから俺は気付いた。

ギャラリー達は俺にのみ、侮蔑をこめた視線を向けていることに。子供も含めてだ。

逆に金髪に対しては、憐れみがこもった態度を向けているのが手に取るようにわかる。

「責任もってつれかえってちょうだい」

「真昼間にこんな変人いたらびっくりするわもっ！」

「子供たちが怖がってるのよ、さあ早く出てって」

「もっ、あんたなんか大嫌い！」

周りにいた主婦の群れが便乗し口ぐちに喋り出す。

くそっ、好き勝手言いやがって。一人違うのがまじってたきがするが今はスルーだ。

口には出さず、心の中で悪態をつく。俺が非難の矢を浴びている状況に対し、事の発端である金髪は未だに地面に膝をついたままだ。

どうみても演技だろ。なぜ気付かないんだ。

思わずむかつ腹が立った俺は憤怒しそうになったが、祖父の教えを思い出し冷静さをなんとか保つ。

よくよく考えてみれば、ここの公園は俺が住むマンションの目の前に位置してる。

つまりここは俺にとっての暇つぶし兼、憩いの場になるのは確かだ。ほぼ間違いなく近所に住んでいるであろう主婦達に悪い印象を与えるのはマズいだろう。

引っ越してきたばかりの俺にとって、これ以上ない痛手になる。

大きく息をはいてから俺は金髪に振り返った。金髪はまだ地面に膝をついている。怒りを通り越して呆れてきた。

「わかったよ。おいあんた、ついてきな」

声に反応した金髪が膝をついた態勢のまま顔を上げる。その目は大きく見開かれていた。

ん？ なぜだろう、嫌な予感がする。

「斉藤！！」

あ、なんかデジャヴ。

またもや俺と金髪は抱き合うようにして倒れた。

↓

「さて、どういうつもりであんな真似したかしらないが、これ以上付きまとうなら本当に警察につきだすからな」

俺は公園の外に出たことでギャラリーの視線から解放されたのを機に金髪に詰め寄っていた。

まさか一度ならず二度までも抱きついてくるとは思わなかったよ。

おかげで主婦たちにいらぬ誤解を招いてしまったかもしれない。まあそれについては時間が解決してくれるだろう。この金髪とは今日限りで会うことはないんだからな。
なんにせよ人目さえ避けられればこっちのものさ。

「なああんた、聞いてるのか？」

金髪は固まったまま動こうとせずただ一点を凝視している。

その先にはファストフード店。

：

肩を揺すって反応を確かめようとしたが、それが失策だった。

肩に手が触れた途端、金髪の体は前のめりに倒れ公園にいた時と同じように膝をついたのだ。

「ダメだ…限界」

途方に暮れた俺は、やむをえず頭を抱えたが意を決して金髪を連れファストフード店の扉を叩いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1761o/>

少女戦争～THE Tutorial

2011年10月7日13時54分発行